

ひたちなか 埋文だより

53



古墳に登る 虎塚古墳を案内すると、「古墳に登ってもいいですか？」と尋ねられることがあります。虎塚古墳の場合は「どうぞ登ってみてください」と答えています。古墳に登ると、下からでは見えない古墳の形や高さを知ることが出来ます。また、古墳に登るといふ行為は、古墳が造られた時代、その墓に関係する豪族のみに許されていた特別な行為ではなかったかと考えると、「王様気分」を味わうことも出来るでしょう。もちろんそんなことは関係なく、小山（虎塚古墳前方部）に登ることが純粹に楽しいということもあるかもしれません。（2020.2.14）

特集 今年2020年は 虎塚古墳壁画公開から40年です！

虎塚古墳石室壁画の点検作業（忽那敬三）

虎塚古墳壁画の保存のための取組み（犬塚将英）

「私的茨城考古学外史ー遺跡・人 出会いと別れー」第2回(つづき)発掘三昧への道 序章（瓦吹 堅）

横穴墓を歩く② 成増天神脇遺跡横穴墓群（小山侑里子）

資料紹介 落神のサトウガイ（鈴木素行）

1ケース・ミュージアム 51 いつ付いた？龍目痕のある遺物たち

エッセイ 土鍋の足

ひたちなか市の遺跡⑥改訂版 平磯・阿字ヶ浦中学区編

虎塚古墳鳥便り① コゲラ

虎塚古墳花便り② ヒガンバナ

埋文センターの日々 2020 前期

ほか

1972年 ● 高松塚古墳調査

1973年 ● 虎塚古墳第1次調査



閉塞石を取り除いた直後の石室内



壁画が確認される瞬間



保存のため一時埋め戻される石室前

1978年 ● 石室試験公開



石室内の環境調査の様子



試験公開時の仮の観察室と見学を待つ人々



試験公開時の仮観察室内での見学風景

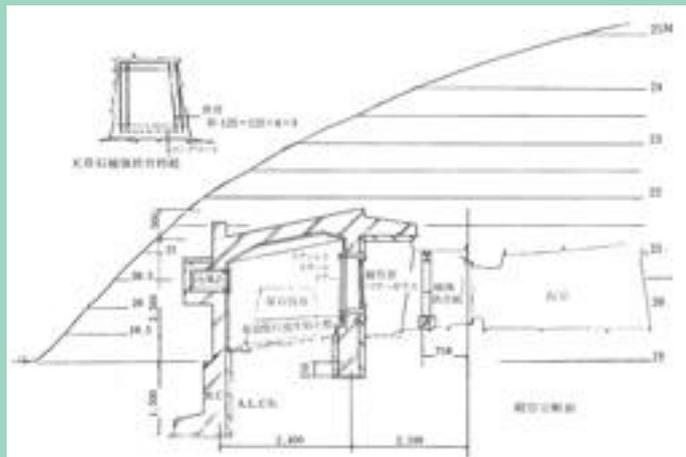
● 虎塚古墳壁画公開開始



現在では見ることが出来ない公開施設の外側



試験公開時の環境調査測定器の写真



墳丘の景観保護のため、公開施設は墳丘内部に

虎塚古墳壁画公開から40年です!

虎塚古墳は、1973(昭和48)年9月12日に石室内の壁画が確認されました。未盗掘の石室でしたので、壁画の存在は誰も予想していませんでした。しかし、発掘調査では、前年の1972年に確認された奈良県明日香村の高松塚古墳を保存する目的として、石室の閉塞石を開ける前に石室内の温度や湿度などの環境調査を実施していました。このデータは本来であれば高松塚古墳の保存に活用されるものでしたが、結果的に虎塚古墳の壁画を保存するための貴重なデータとなりました。虎塚古墳の壁画について「保存と公開」を基本とした整備計画を立てることができたのも、これらの環境データがそろっていたからでしょう。

今年2020年から40年前の1980(昭和55)年10月25日、壁画の公開施設が完成し、一般公開が始まりました。ここでは、公開開始40周年を記念して、壁画確認から公開までの経過と、現在も続く「保存と公開」についてご紹介します。



観察室での公開の様子



虎塚古墳壁画公開施設完成時



石室内での点検の様子(忽那敬三さん)



虎塚古墳壁画公開の様子

1980年



地元の中根ときわ会による清掃活動



史跡保存対策委員会での対策会議

虎塚古墳の壁画公開が始から四〇年経過した今でも公開が出来るのは、発掘当時から関わっていただいているたくさんの先生方のご指導・ご協力のおかげです。一〇年ほど前からは、発掘当時から先生方に加えて、それを引き継ぐ新しい先生方に参加いただいております。ここでは石室内の点検を引き継いだ二人の先生方に原稿をお願いしました。

虎塚古墳石室壁画の点検作業

明治大学博物館 忽那敬三

毎年春・秋の石室公開の前後に行われる点検は、石室と壁画を保存する上で欠くことのできない、非常に重要な作業です。ここでは、目視点検と顕微鏡撮影についてご紹介します。

目視点検 石室につながる観察窓の外扉をアルコールで消毒を行いながら開け、石室外にLEDの光源をセットして室内を照らし出します。壁画は、その年の降雨量や気温によって状態が微妙に変化します。そのため、約半年もの間隔が開く秋の公開前点検では、この壁画が映し出される時が毎回緊張する瞬間です。

観察窓越しに複数名で壁画と石室内の状況を確認し、異常があれば実際に石室内に立ち入る目視点検を行います。汚染物質を外部から持ち込むことを避けるため、点検者は今回の新型

コロナ禍でもニユースでよく目にした医療関係者が使う全身を覆うタイプの防護服に身を包み、足全体を覆うゴム製スリッパに履き替え、手足をアルコール消毒したうえで観察窓を開けて石室内に足を踏み入れます。

石室内はほぼ湿度九九%、温度は一五度前後で安定しているため、入った瞬間にややひんやりとした空気を感じます。点検者が石室内に入ると、外気の侵入を防ぐため観察窓が外から閉められます。石室内は無風、そして無音の空間であり、まさしく別世界に居るような感覚にとられます。羨道せんどう(通路)部分を進み、壁画が描かれている玄室に入ると、そこは古墳時代の人々が造り出した死者を送るための特別な空間です。全面に白土を塗った壁面に赤色で描かれた絵画もさることながら、なきがらが見上げたであろう一面真っ赤に塗られた天井を見るたびに、一四〇〇年の時を経て古墳時代の人々の死者や死後の世界に対する思いに直接触れているような感慨を覚えます。

さて、感動もほどほどに壁画と石室の状態に異常がないか確認を行います。点検者の体温で石室内の温度が上がるのを防ぐため、石室内の作業は手早く済ませなければなりません。点検中に大きな地震が起きて閉じ込められないよう心の中で祈りながら、懐中電灯を片手に、記憶に基づいて細かくチェックしていきます。疑わしい部分はカメラで撮影し、過去の写真と

比較します。壁画の顔料とキャンバスである白土の状態はもろんのこと、石材のヒビや隙間から伸びた根、床面の生物の状況も確認します。生物は採取し、根は壁画を傷つけないよう慎重に切り取り、有害でないか種を特定するため分析に回します。

石室内の高さは一・四mなので身長一六三cmのやや小柄な私でも狭く、立ち上がることはできないので、常にしゃがむか中腰、あるいは立って背中を丸めた状態での作業を強いられます。最も気を使うのが石室内で方向転換をする時で、背や腰、肘や膝が壁画に触れないよう細心の注意を払わねばなりません。

電子顕微鏡による壁画撮影 年に一度、壁画表面の状態確認のために顕微鏡カメラによる撮影を行っています。カメラはパソコンにつながっている直径約三cmの太いケーブルごと観察室から石室内に引き込みます。また、手ブレを防ぐために三脚に固定しなければいけません。過去の状態と比較するため石室内の五か所を撮影しますが、狭い石室内で中腰の姿勢を保ちながら撮影機材と私自身が壁画に触れないよう注意を払いながらの作業は、非常にハードです。また、三段階の倍率ごとに手動でピントを合わせねばならないのですが、石室内の温度の上昇を防ぐため短時間で手早くこなさなければなりません。大きなプレッシャーです。

点検作業は毎回緊張しますが、この撮影の作

業が最も緊張し、神経を使います。作業をスムーズにこなすため、普段からトレーニングをしています。毎回撮影の終了後には、緊張感から解放されてどっと疲れが出ます。

壁画を守る 汚染物質の侵入を最小限に抑えるため、近年は石室内に立ち入る担当者を限定しています。点検は体力的にも、精神的にも厳しい作業ですが、壁画を守る大きな責任をいつも感じています。虎塚古墳は、一四〇〇年の間、奇跡的に残り、また発掘から現在まで多くの方々の努力により保存・公開されている全国的にも数少ない幸運な遺跡です。大変な作業ではありませんが、壁画を守り、そして次の世代に残していく仕事に携わることには大きなやりがいを感じています。

虎塚古墳壁画の保存のための取組み

東京文化財研究所 犬塚将英

平成一八年に、東京文化財研究所・保存科学部の大先輩である門倉武夫先生にお声がけいただき、虎塚古墳を見学させてもらう機会に恵まれました。このことがきっかけとなり、平成一九年から、ひたちなか市史跡保存対策委員として虎塚古墳や十五郎穴横穴墓群の保存に携わってきました。例えば、私たちは春・秋に実施される一般公開の前後に虎塚古墳壁画の点検

を行っています。

ところで、これまでの虎塚古墳壁画の点検から、近年、彩色の一部が薄くなっているように見えてきていると示唆されてきました。このような現象の主な原因として、壁画表面における結露の発生や水分の移動等が考えられます。私たちは劣化現象の進行具合を調べるために、側壁に沿って床面にポリカーボネート製のパネルを並べて敷いておき、年に二回実施している石室内の点検時に落下物を採取し、顕微鏡を用いた観察や重量の測定を行っています。さらに、劣化現象のメカニズムを調べるために、壁面含水量の計測も石室内の点検時に行っています。

ここでは、壁面含水量の計測について簡単に紹介します。計測を行う時には、当然ですが、貴重な文化財である虎塚古墳壁画の壁面に触れてはいけません。そこで私たちは近赤外線が壁面でのどのくらい反射されるかを調べることに、非接触な手法で壁面含水量の計測を行っています。このようにして蓄積されたデータを解析することにより、虎塚古墳壁画の壁面における水分の多い箇所・少ない箇所がどのように分布しているか、そして壁面の含水量に大きな季節変動や経時変化は生じていないこと等を確認してきました。

以上のような石室内点検時に実施している様々な調査に加えて、虎塚古墳壁画を模した試験片を作成し、劣化現象の再現を試みる基礎実

験も東京文化財研究所にて行っています。試験片の基材には辺田野石を使用しました。そして、風化して白色化した辺田野石の粉末を練って下地層とし、十五郎横穴墓群付近の湿地の泥を焼成して生成した赤色材料を塗布して試験片を作成しました。これまでに、試験片を取り巻く温度・湿度を大きく変化させる実験や、試験片表面に強制的に結露を発生させるような実験を行ってきましたが、現在までのところ、まだ劣化現象を再現することはできていません。

以上のような調査研究を通じて、様々な新しい知見を得ることはできましたが、残念ながら劣化現象のメカニズムの解明には至っていません。私たちが直面している問題は決して簡単ではありませんが、虎塚古墳壁画の保存のために今後も根気強く取り組んでいきたいと考えております。



試験片を使った基礎実験

* 4 頁下背景写真：電子顕微鏡による壁画撮影（忽那歌三氏）

* 5 頁上背景写真：壁面含水量計測（犬塚将英氏）

1 CASE MUSEUM Vol.51 公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

いつ付いた？
籠目痕のある遺物たち

令和2年9月12日（土）
～10月18日（日）

休館日 月曜日（休日の場合は翌日）
開館時間 9:00～17:00（入館は16:30まで）
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

入場無料

茨城県ひたちなか市中根3499 TEL: 029-276-8311

平成三〇年度に行われた、市毛上坪遺跡第二六次調査では、古墳時代後期と考えられる住居跡から、籠目痕が残る粘土の塊が出土しました。当時使われていた籠や笊などの、植物でできた道具は朽ちてしまい残ることは少なく、道具をどのようにして使っていたか知るための貴重な資料です。

今回はこの粘土塊の紹介を中心に、市内で過去に出土した籠目痕が付いた遺物について展示しました。

籠目痕付き粘土塊

出土した粘土塊は、直径が約二三cmで厚さが一四cmあり、平面と側面に籠目痕が包みこむように付いています。籠目は六つ目編みという三方向に素材を編んで六角形の目を形成する編み方で、籠自体は朽ちてなくなり実態は分かりませんが、痕跡の形状から素材は竹や樹皮を用いていると考えられます。また、側面には布目の

痕跡もあります。この粘土塊が出土した住居跡は火災にあっており、その際に粘土塊も一緒に焼けたため、このように籠目痕が残っていたのだと考えられます。

全国的にも出土例がほとんどなく、唯一確認できたのは、大阪府東大阪市の鬼塚遺跡で確認された籠目痕の付いた粘土塊六点です。そのうち一点の粘土塊について、住居内で土器作りのための粘土を籠に入れて吊るし乾燥させていたものが、火災によって焼けて落下したものと考察されています。市毛上坪遺跡の粘土塊も特徴が似ていることから、同じく住居内に吊るされていたのかもしれない。

籠目痕が付いた「被籠土器」

被籠土器は、籠が接触していた部分以外が日焼けや色あせ、土器の使用による煤の付着などによって籠目が浮かび上がった土器です。西日本では弥生時代後期、東日本では古墳時代前期に多く出土します。籠で覆われた土器の使用方法は諸説ありますが、稲作が始まった弥生時代には使われていることから、種籾を入れて運んだか、住居内で吊るして保存していたのではないかと考えられています。今

回展示した堀口遺跡・武田原前遺跡・鷹ノ巣遺跡も色あせや煤の付着により籠目が明瞭に浮かび上がってみえます。いずれも住居内から出土しているもので、種籾をいれて保存に使っていたのかもしれない。

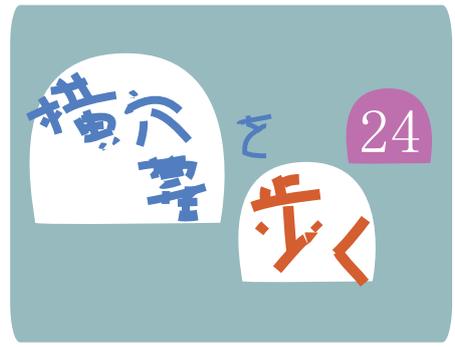


0 10cm

市毛上坪遺跡出土籠目痕付き粘土塊



展示の様子



東京都板橋区
なりますてんじんわき
成増天神脇遺跡横穴墓群

小山 侑里子
(板橋区教育委員会)

成増天神脇遺跡横穴墓群は、東京都板橋区内の北西端に位置しており、荒川支流の白子川下流域の右岸台地縁辺に所在する。二〇一九（平成三二）年四月、集合住宅建設工事中に不時発見され、計二基が確認された。一九五八（昭和三三）年に一基のみ確認されていた愛宕山横穴墓に次いで、板橋区内で調査された横穴墓の二例目にあたる。

一号横穴墓は玄室の平面形状が比較的整った長方形で、断面形状はアーチ形を呈し、こぶし大ほどの自然石がほぼ全体に敷き詰められ、礫床面が形成されていた。ほぼ失われていた墓前域の残存部分からは、閉塞石と考えられる自然石の列がみられた。二号横穴墓の玄室は胴張りで、隅が丸みを帯びた羽子板型である。天井が崩落した状態で発見されたが、残存部分をみると、奥壁は弧を描くように、緩やかに前傾する断面形状だと考えられる。羨門近くの礫床にはやや大きい礫が用いら

れており、墓前域では一部欠損した切石が確認された。

後述する人骨のほかに出土遺物が無いため、築造時期については不明である。しかし、平面及び立面の規模を計測すると、唐尺に基づく長さが多いことから、八世紀初頭頃に造られたものと考えられる。

横穴墓の玄室から出土した人骨について分析した結果、一号横穴墓からは五体、二号横穴墓からは三体以上の人骨が発見されている。このうち一号横穴墓では、一体の人骨が頭部を奥壁に向け、伸展葬と思われる状態で検出された。最終埋葬者と考えられるこの人骨は壮年以降の男性で、それ以外の人骨は北側の隅に集骨され、「かたづけ」を行っていたことがわかる。

この人骨は、熟年男性・壮年女性・性別不明の青年と子供のものと判断された。

二号横穴墓で発見された人骨は、主軸に平行して川の字のように並んだ埋葬状態であった。南側の一体は壮年初期の男性で、うつ伏せの伸展葬と思われる状態で検出された。中央の一体が青年女性、北側の一体が壮年男性と判断された。

以上の調査結果は、多摩



1号横穴墓人骨出土状況



2号横穴墓玄室

川流域に比べて横穴墓の分布が少ない荒川流域における、新たな事例として注目される。これらの横穴墓を築造した人々はどこに住んでいて、被葬者はどのような人物だったのだろうか。成増天神脇遺跡内において、想定される横穴墓の築造と同時期の住居は一軒だけしか確認されておらず、居住域の推測は難しい。なお、二号横穴墓から出土した壮年男性の推定身長は一六五cmであり、当時の関東・武蔵地方の古墳時代男性の平均より比較的高身長且つ体格が良いとみられる。七一六（霊亀二）年には高麗郡が建郡されていることから、朝鮮半島に縁のあった被葬者である可能性も推測されるが、想定域を出ない。今後の荒川流域での調査事例を待ちたい。

阿字ヶ浦(阿字ヶ浦中学区編) 改訂版



磯崎東古墳群では、1950年に54基の古墳が確認されています。古墳は直径約20mの円墳が主体で、1989年に発掘調査した第33号墳のみが全長40mの帆立貝形古墳です(上写真)。同じ年に調査した第30号墳の石棺からは、大刀や鏡が出土しました(下左写真)。また、1967年の調査では、鹿角などで作られた非常に珍しいやじりが出土しています(下右写真)。



三ツ塚古墳群は、14基の円墳で構成されています。1949年に発掘調査を実施し、埴輪や大刀、鉄鏃、ガラス玉などが出土しています。平磯中学校の敷地内には、第11号墳のものと思われる石棺が移築されています。

3つの小学で初めてと「阿字ヶ浦」が2021年度以降はあります。

ひたちなか市の遺跡 6 (平磯・阿)

平磯・阿字ヶ浦中学区には、現在、29 の遺跡がみつかっています。この中の 13 遺跡が古墳や古墳群で、市内でも古墳の数が多いい地区です。代表的なものには、市内最大規模の川子塚古墳や、数十基の古墳が群集する磯崎東古墳群、大型の円墳を有する三ッ塚古墳群などがあります。また、中世の遺跡として全国的にも珍しい塩づくりの村の跡である沢田遺跡も存在しています。

遺跡の発掘調査は、2019 年までに 36 回実施しています。1998 年に調査を行った泉上遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器が出土しています。古墳の調査は 1949 年から三ッ塚古墳群・新道古墳群・入道古墳群・磯合古墳群・磯崎東古墳群で実施しており、銅製の鏡や豪華な飾りのある大刀など貴重な遺物が出土しています。1988 年から実施した沢田遺跡では、塩水を貯めるための鹹水槽跡や塩水から塩を煮出す釜屋跡などの遺構、塩づくりの道具が見つかっています。



沢田遺跡では、海水から塩をつくる揚浜式塩田が室町時代から明治時代まで行われていました。1988 年から実施した発掘調査では、塩づくりに関係する釜屋跡 100 基、鹹水槽跡 1393 基などが見つかったほか、木製の道具類も出土しました(写真左下)。また、砂浜に埋葬された 87 体の人骨もみつかっています(写真左上)。



泉上遺跡出土のナイフ形石器



新道古墳群出土の刀装具

2019 年までに発掘調査した遺跡 (地図上の●印)

平磯小地区：三ッ塚古墳群、平磯宮上遺跡、平磯長堀南遺跡、新道古墳群

磯崎小地区：磯崎東古墳群、磯合古墳群、入道古墳群

阿字ヶ浦小地区：泉上遺跡、川子塚西古墳群、沢田遺跡、西中丸遺跡、愛宕神社古墳、長砂渚遺跡



イメージ

平磯・磯崎・阿字ヶ浦地区では、校と2つの中学校を統合し、市内なる小中一貫の統合校「美乃浜学園」に開校します。よって、2021年度に開校します。よって、2021「美乃浜学園区編」の遺跡地図とな

約 13000 年前

約 2300 年前

約 1700 年前

約 1300 年前

旧石器時代

縄文時代

弥生時代

古墳時代

奈良・

(前回からのつづき)

一九七一年、一年遅れの卒論を書くため、慶応義塾大学に江坂先生をお訪ねし、校舎裏の江坂研究室で土偶の変遷などについて御指導を受けた。その途中、後輩の宮崎博君がヒョッコリ先生を訪ねてきた。日本考古学協会の話だったらしく用件を終えて宮崎君が退室すると、入れ替わるようにすぐ女子大生が入ってきた。江坂先生から紹介されてビックリ。彼女は慶応義塾大学二年で、是川遺跡の発見者泉山斐次郎翁の孫娘だという。江坂先生は桜田通り沿いの喫茶店へ我々を案内し、是川の話や東北の遺跡についていろいろ話された。私は四年ほど前、是川を訪問して斐次郎翁に会ったことを話すと驚き、女子大生は幼い頃から調査に訪れていた江坂先生とは知り合いだったと聞かされた。その後、江坂先生とは何度かお会いして御指導をいただいた。一九九九年、江見水陰の『地底探検記』の解説本出版の事で、中山清隆氏と斎藤忠先生宅訪問後にご自宅をお訪ねしたことも懐かしい。斎藤忠先生は二〇一三年七月二二日一〇四才、江坂先生は二〇一五年二月八日九五才で鬼籍に入られた。

私が本格的に発掘調査に参加するようになったのは一九六七年からで、六月花見川遺跡、七月から八月には家の子古墳群の調査に参加し、九〜十二月には千葉県我孫子市湖北台遺跡群の調査に加わった。この調査は日本住宅公団による住宅団地造成に伴うもので、担当は野田市立博物館館長下津谷達男先生、副団長は千葉県立東葛高校の古宮隆信先生。調査参加学生は一級上の高橋一夫・河野実・沢皇臣氏達で、同学年の昼間孝次・佐藤正好君。またOBの佐藤武雄・中山吉秀・村田一二氏等は、休日には応援を兼ねて指導に来てくれた。発掘は広大な造成地の中に数か所の遺跡があり、

私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—

第2回 発掘三昧への道 序章



瓦吹 堅

我々は転戦した。

宿舎は成田線布佐駅より利根川沿いの成田街道脇にあった古い旅館で、利根川に架かる栄橋を渡ると茨城県北相馬郡利根町である。橋のたもとには「間引き絵馬」で有名な徳満寺があり、何度か参拝したが、茨城県立歴史館に勤務していた一九九八年、春の特別展「絵馬展」でその絵馬を借用に伺った。

湖北台の調査遺跡へは、成田線布佐駅から湖北駅間を朝夕往復し、出土した完形の土師器甕形土器を電車で運んだこともあった。

或る地点で六世紀の集落跡を調査。大型住居跡を掘り下げ、平板で遺構測量を始めると、工事用重機車両（スクレーパー）が遺構の周囲を削り出し、住居のコーナー部をあっという間に削り取られた。平板はガタガタと動いて狂い、我々は憤慨した。そんな状況の中で調査だったが、当時全国的に大型開発の中、工事に迫られて調査が実施されていたような状況だった。また、大型開発に伴う遺構検出は、ブルドーザーによる表土除去が主流だった。無論、遺構検出には手掘りが望ましいが、限られた調査期間の短縮という点からいろいろ課題もあったが、ブルドーザーによる表土除去が行われていた。

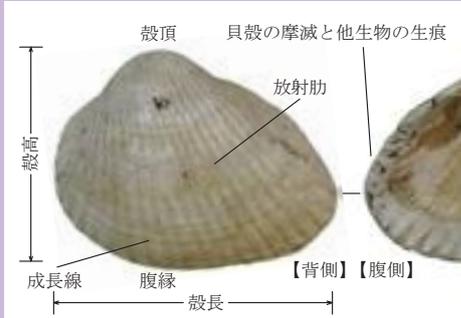
当時の発掘での遺構調査は地下足袋が原則で、参加者は皆リュックの中に地下足袋を入れて現場に出かけた。湖北遺跡で八世紀の住居跡を調査中、一級上のK先輩から地下足袋での調査の必然性を切々と指導されたことを思い出す。一九六〇〜一九七〇年代、全国的に大型開発に伴う発掘調査組織が全国的に発足し、一九七七年に茨城県教育財団に調査課が新設された時も、調査用具の中に地下足袋が含まれていたことを思い出す。

一九六〇年代、全国の大学の自治会は、バリケードで大学を封鎖して全共闘運動が激化した。この大学紛争は発掘調査現場をも徐々に巻き込んでいった。

おちがみ 落神のサトウガイ

— 那珂川下流域における貝輪の製作 —

鈴木素行



サトウガイの貝殻 (図 1-1, 左殻)

「大貫のアカニシ」「三反田のベンケイガイ」(『ひたちなか埋文だより』第30・50号)の続編として、那珂川下流域における縄文時代の貝輪について検討しました。今回は、サトウガイなどアカガイ属が主な対象です。貝輪の素材の入手については貝殻表面の観察が、製作については貝層中に残された未加工の貝殻や碎片、未成品が大きな手掛かりとなります。

1 サトウガイの貝殻

サトウガイという名前の貝は、一般に馴染みが薄いにちがいない。食品として普及したアカガイと同じアカガイ属(Scapharca spp.)の一種で、サルボウガイとともに、この三種は貝殻の特徴がよく似ている。殻表が放射肋という凹凸の筋で覆われていて、これがサルボウガイは三二本前後、サトウガイは三八本前後、アカガイは四二本前後というように異なる。他にも平均的な殻の大きさや厚さ、放射肋上の結節の有無などに相異が見られるもの、加工した製品、特に破片では放射肋が数えられないこともあって、「サルボウガイ製品」などと呼ばれて一括されてきた。

藤本弥城先史資料としてひたちなか市埋蔵文化財調査センターに所蔵されている大洗町大貫落神貝塚(おおぬき)の資料調査により、この貝塚ではベンケイガイとともに、サトウガイを主な素材とする貝輪も製作されていたことが推定された(鈴木二〇一九)。ベンケイガイについては既に報告してあるので、本稿では、サトウガイを中心としたアカガイ属の資料を紹介し、併せて那珂川下流域における貝輪の消長を窺っておきたい。

2 大貫落神貝塚の調査と報告

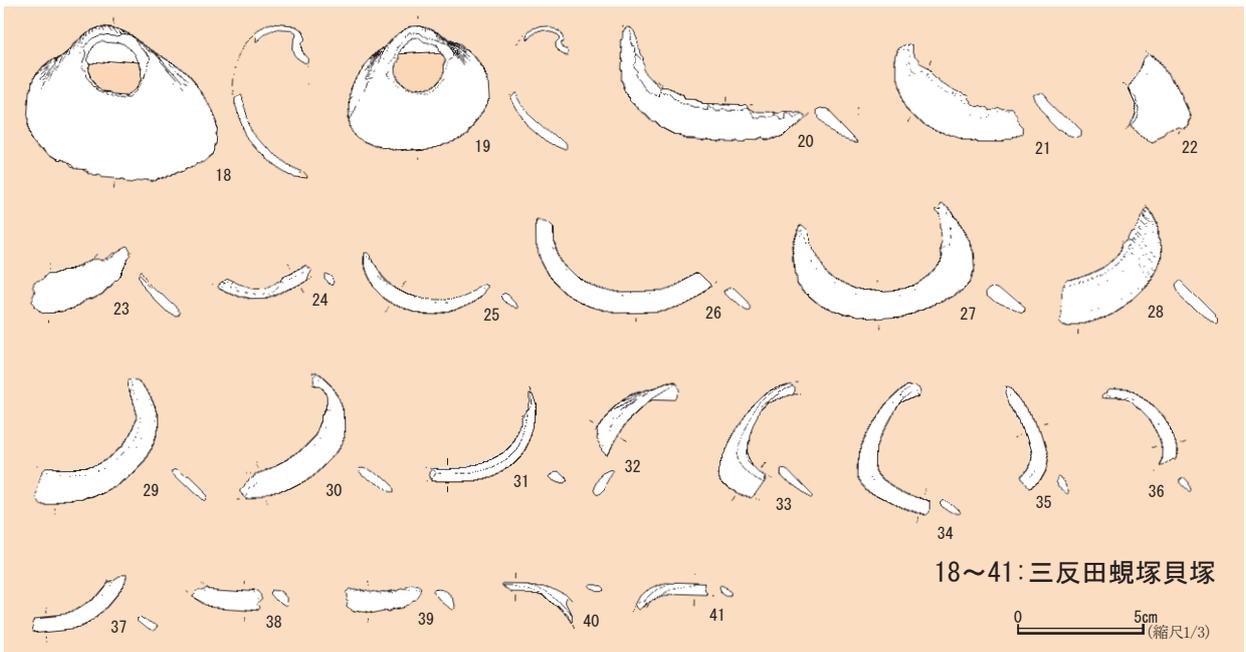
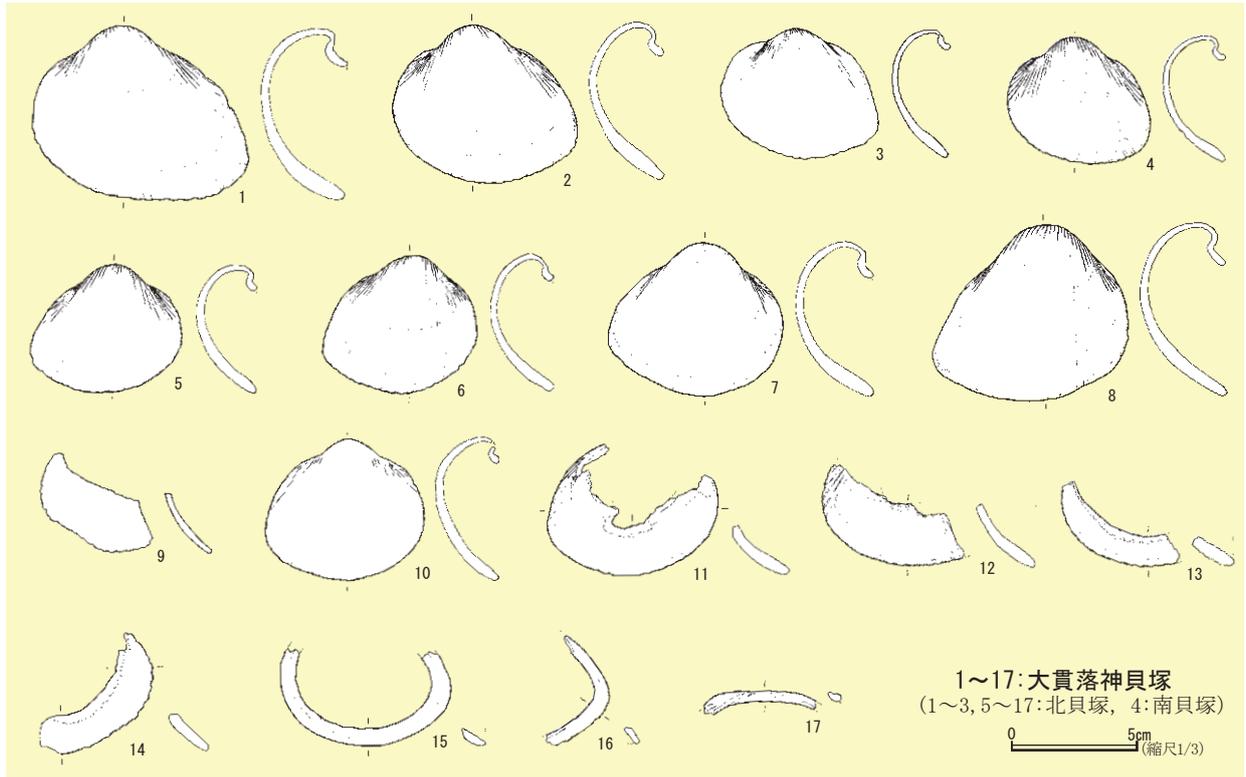
大貫落神貝塚について、報告書が刊行された発掘調査には二つがある。一つは藤本弥城・武が、主として一九六九

一九七三年に実施した発掘調査。北貝塚と南貝塚がまとめて報告され、「貝塚の形成された時期は縄文時代後期の堀之内式から後期末葉に至るまでのもの」(藤本一九八〇)と総括された。貝輪は、ベンケイガイとサトウガイの一点(註)が掲載され、発掘経過には「未完成貝輪」という記載が見られる。「自然遺物」の貝にも、ベンケイガイとサトウガイの記載があり、「装飾用として採捕」と表現して、潜水等により生息域から捕獲したことを想像していたようである。

もう一つは井上義安を担当者とする調査会が、開発に伴い一九九八年に実施した発掘調査。北貝塚と南貝塚が分冊で報告され、同じく縄文時代後期であっても、南貝塚は堀之内1式から加曾利B2式まで、北貝塚は主に加曾利B1・2式の時期に貝層が形成されたことが分析されている(藪沼二〇〇〇)。貝輪は、南貝塚からオオツタノハが一点の他に、ベンケイガイとサトウガイ等の一点が掲載され、「未成品」が記載された。動物遺存体にも「マルサルボウガイはやや大きな殻で貝輪の素材として運ばれた可能性」(金子二〇〇〇)が指摘されている。「マルサルボウガイ」とはサトウガイの異称である。北貝塚には、貝輪が報告されていない。

3 大貫落神貝塚と三反田蜆塚貝塚

藤本弥城等の調査による大貫落神貝塚の貝輪は、北貝塚が卓越しており、井上義安等の調査



図番号	殻右左	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	段階	図番号	殻右左	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	段階	図番号	殻右左	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	段階
1	L	69	86	65.0	素材	-	L	49	55	15.5	素材	24	R?	*14	*36	0.6	研磨
2	L	62	72	44.9	素材	-	L	53	55	20.9	素材	25	L?	*25	*49	2.0	研磨
3	L	51	61	20.8	素材	-	R	60	71	39.2	素材	26	L	*39	*69	5.5	研磨
4	L	50	57	22.3	素材	-	R	60	70	32.6	素材	27	L	*46	71	13.7	研磨
5	R	51	59	21.7	素材	-	R	54	67	27.8	素材	28	R	*47	*40	9.8	研磨
6	R	55	61	29.2	素材	-	R	52	60	16.0	素材	29	R	*49	*49	6.7	研磨
7	R	61	69	41.9	素材	-	R	51	60	9.1	素材	30	R	*50	*41	6.5	研磨
8	R	69	77	46.1	素材	-	R	41	50	6.4	素材	31	R	*36	*41	2.8	研磨
9	L	*38	*44	5.8	素材?	-	L	42	*49	8.6	素材	32	R?	*29	*31	2.5	研磨
10	R	56	62	24.3	素材	-	L	*42	*48	10.3	素材	33	R	*45	*30	4.6	研磨
11	R	*52	67	19.6	敲打	-	L	*44	*39	7.8	素材	34	R	*52	*30	4.2	研磨
12	L	*40	*56	11.4	敲打	-	L	*30	*43	7.1	素材	35	L	*40	*18	2.2	研磨
13	L	*34	*46	8.5	敲打	-	L	*27	*31	3.2	素材	36	L	*30	*30	1.0	研磨
14	R	*48	*45	10.5	研磨?	18	L	62	77	33.2	敲打	37	R?	*22	*37	2.2	研磨
15	L	*39	66	6.5	研磨	19	R	50	65	16.3	敲打	38	L	*15	*28	0.9	研磨
16	L	*43	*25	1.8	研磨	20	L	*45	*72	8.0	敲打	39	-	*9	*30	1.6	研磨
17	L	*9	*44	1.7	研磨	21	L	*39	*50	9.5	敲打?	40	L	*15	*27	1.1	研磨
-	L	56	65	23.5	素材	22	L	*35	*25	3.9	敲打	41	R?	*11	*28	1.0	研磨
-	L	54	64	34.3	素材	23	R	*28	*38	3.0	敲打						

・「長さ」は殻高方向の計測値、「幅」は殻長方向の計測値、「*」付数値は残存長。「段階」は製作段階。

図1 大貫落神貝塚と三反田蜆塚貝塚におけるアカガイ属の貝輪製作

報告とは逆転する。一方の報告のみでは貝輪の偏在とも捉えかねないが、両方の報告を併せれば、北・南貝塚に大きな異なりは見られない。資料調査では、貝層サンプル中にも貝輪素材の混在を想定して、観察を行なった。その結果、放射肋の数からサルボウガイ(図10・11)、貝殻の薄さからアカガイ(9)と推定される破片をわずかに含むものの、ほとんどがサトウガイと判断されたのである。さらに、貝殻には摩滅の痕跡が著しく、腹縁の一部が摩り減つて変形したもの(5・6など)があり、ゴカイ類のような海棲生物の生痕による損壊(1)も観察された。これは、生体が捕獲されたのではなく、水摩され海岸に打ち上げられた死殻が採集されたと考えられる。ベンケイガイについても同じく観察されており、採集地としては、直近の鹿島灘沿岸

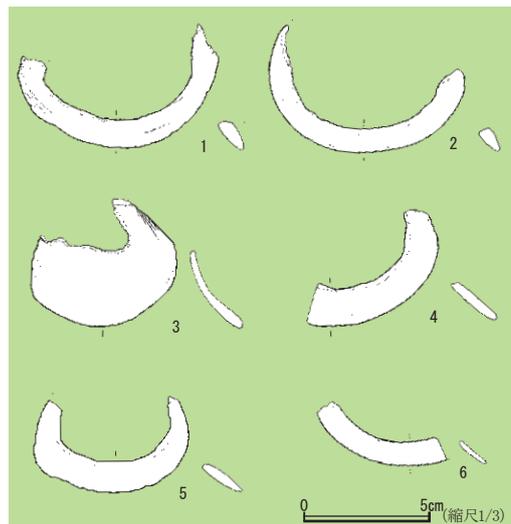


図2 南高野貝塚の貝輪



図3 貝輪を出土した久慈川・那珂川流域の遺跡

が想定されよう。現在の鹿島灘の海岸では、ベンケイガイとともにサトウガイの貝殻が打ち上げられることを実際に確認している。サトウガイは、サルボウガイと比べて平均的に大きく、アカガイと比べて貝殻が厚いことも、貝輪製作の素材として優れていたであろう。素材段階(1~10)、穿孔から孔の拡大までの敲打段階(11~13)、研磨段階(14~17)までの全工程が、大貫落神貝塚には認められ、特に素材段階が敲打・研磨段階を数量で上回る。これに対して市内の三反田蜆塚貝塚は、敲打段階(18~23)、研磨段階(24~41)のみで、素材段階の資料は確認されていない。これはベンケイガイの貝輪製作の痕跡と共通しており、やはり大貫落神貝塚から三反田蜆塚貝塚へと、穿孔された未成品の状態(18~19)でサトウガイが供給されたことを推測できる。

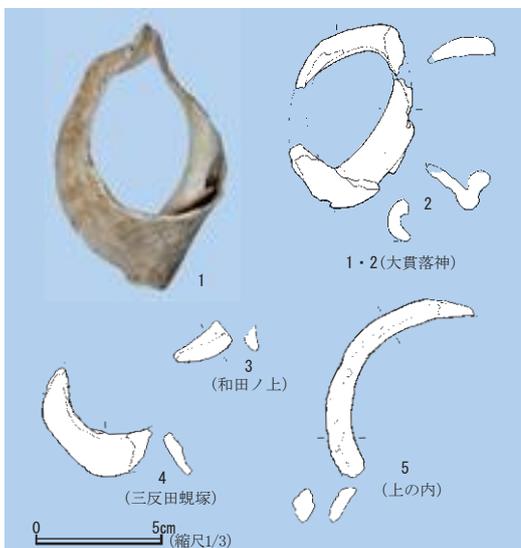


図4 アカシ、カキ類の貝輪

久慈川下流域においては、河口部の日立市南高野貝塚からベンケイガイとアカガイ属の貝輪が採集されている(図3)。南高野貝塚ではオオツタノハの貝輪二点が既に報告されている(今橋一九八〇)が、このような遠隔地からの搬入品とともに、近在の素材で製作された貝輪もあった。穿孔された未成品(3)までは確認できるが、これがそのまま三反田蜆塚貝塚のような製作工程を示すのか、大貫落神貝塚のように素材も残されているのか、気になるところである。

4 貝輪製作の消長

貝塚を形成した遺跡にはほぼ限定されるものの、那珂川下流域においては、縄文時代前期から弥生時代中期までの貝輪が検出されている(図三)。縄文時代の中期と後期前葉の吉田・上の内・

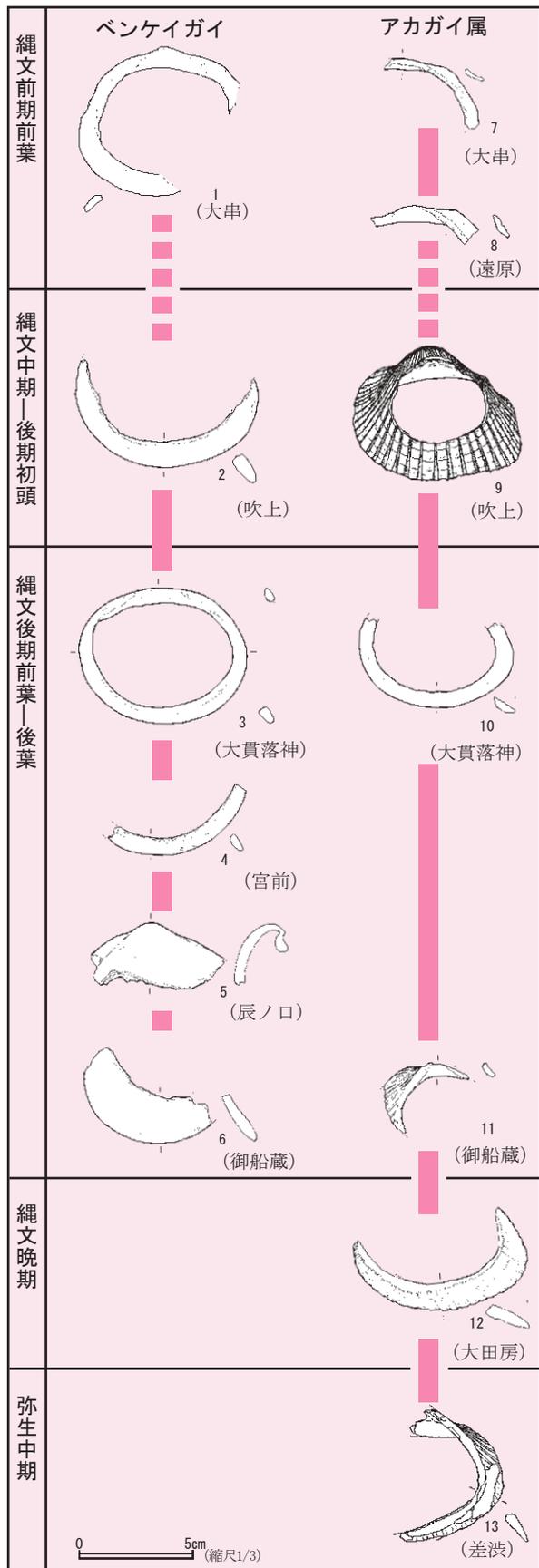


図5 那珂川下流域におけるベンケイガイ、アカガイ属の貝輪 (8 は鈴木2014, 9 は上川名編1972, 13 は鈴木・色川2008より引用, その他は新たに実測して掲載した)

三反田蜆塚・吹上・大貫落神貝塚にはアカニシ(図四一・二)、前期から後期初頭までの和田ノ上・上の内・三反田蜆塚・吹上貝塚にはカキ類(3~5)の貝輪もわずかに見られるが、この地域の貝輪製作の素材は、時期を通してベンケイガイと、サトウガイなどアカガイ属が主体であった(図五)。海岸から獲得された素材が沿岸域の遺跡で加工され、多くは穿孔された未成品として、上流方向の遺跡へと供給されたことが、大貫落神貝塚と三反田蜆塚貝塚の資料からは想い描ける。但しこれは、後期の事例であって、当該時期には土製模造品が製作されるなど内陸部の遺跡にも需要の高まりが認められている。今後は、大貫落神貝塚を前後する時期の貝塚につ

いても、素材や加工痕跡の混在に留意した貝層の分析が必要である。

謝辞 大近平遺跡の遺物の観察では、猪狩俊哉氏・綿引逸雄氏(日上市郷土博物館)、平原貝塚の遺物の観察では、林 恵子氏・中泉雄太氏・川又清明氏(東海村教育委員会)にお世話をいただいた。心より感謝を申し上げます。

- 註一 かつては「アナダラ属」という分類による呼び方もあったが、本稿の分類は奥谷編二〇〇〇に拠る。
- 註二 実測図は一六点であるが、写真図版に一七点が掲載されている。
- 註三 大貫落神貝塚のベンケイガイ(鈴木二〇一九の図六一・一〇・一)については、六点が北貝塚、二点が南貝塚、四点が不明である。
- 註四 製作の工具としては、南貝塚に報告された「有溝石製品」を貝輪内縁の研磨に使用した砥石ではないかと想定している。
- 註五 縄文時代中期後葉「加曾利E式」に伴い未成品が二点検出されている(鈴木・小松崎二〇〇九)。
- 註六 縄文時代晩期は、日上市大近平遺跡(大賀他二〇一五)でもア

カガイ属の貝輪(Benkeigai「サルボウ」)が出土しており、ベンケイガイは検出されていない。

引用・参考文献

- 今橋浩一 一九八〇「オオツタノハ製貝輪の特殊性について」『古代探叢』早稲田大学出版部 一二九―一四〇頁/大賀健他二〇一五「大近平遺跡発掘調査報告書」日上市教育委員会/奥谷喬司編二〇〇〇『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会/金子浩昌二〇〇〇「大貫落神南貝塚の動物遺体と骨角貝製品」『大貫落神南貝塚』所収 一七―二四頁/上川名昭編一九七二「大洗吹上遺跡」大洗吹上遺跡調査団/鈴木素行二〇一四「画像で報告する遠原貝塚J7号住居跡」『ひたちなか埋文だより』第四一号、六―八頁/鈴木素行二〇一九「三反田のベンケイガイ」『ひたちなか埋文だより』第五〇号、一四―一八頁/鈴木素行・色川順子二〇〇八「部田野のオオツタノハ」『ひたちなか埋文だより』第二八号、八―一二頁/鈴木素行・小松崎恵子二〇〇九「大貫のアカニシ」『ひたちなか埋文だより』第三〇号、一―一四頁/藤沼香未由他二〇〇〇『大貫落神北貝塚』『大貫落神南貝塚』大貫台地理文化財発掘調査会/藤本弥城一九八〇『那珂川下流の石器時代研究II』私家版

土鍋の足



これは武田西塙遺跡の一〇世紀後半の住居跡から出土した土鍋の足です。先が少し曲がっていて、先端外側にくぼみを少しつけることで、つま先を表したようです。

こうした足を三つほど付けた土鍋は三足鍋と呼ばれ、平安時代の遺跡から時々出土します。多くは割れていて足だけが出土することが多いのですが、出土量が少なく、一般的な煮炊具ではなかったようです。

古川一明氏は「湯立神事」で用いる「湯立釜」に類似すると指摘されています。私はまだ体験していないのですが、湯立神事では、「屋外で湯を沸かし、煮えたぎった湯を笹葉などで周囲に振り掛けることで斎場や参加者を清め場を浄化する」という所作がおこなわれる。」といえます。武田西塙遺跡から出土した土鍋の足も、こうした神事が古代の村で行われたことを示しているのかもしれない。

(佐々木義則)

参考文献 古川一明二〇一四「古代東北地方における特殊な形態の煮炊用土器について」『東北歴史博物館研究紀要』第一五号



1 コゲラ

虎塚古墳の森には、たくさん的小鸟たちも棲んでいます。しかし、その姿を写真に収めることは私の技量では難しく、なかなかご紹介できる機会に恵まれません。そして今回、やっとその姿を捉えることが出来た鳥がいます。それが今回ご紹介するコゲラです。コゲラは全長一五cmほどの大きさで、日本で一番小さなキツツキとされます。背はこげ茶色に白い点模様がたくさんみられます。

虎塚古墳の森を歩いていると、木をたたくドラミングが聞こえます。耳を澄ませながら古墳を散策していただくこともおすすめです。(稲田健一)



2020.03.18



25 ヒガンバナ

今回ご紹介する花は、秋の訪れを告げるヒガンバナ(彼岸花)です。別名マンシユシヤゲ(曼珠沙華)といます。ヒガンバナはヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草です。花は、名前の由来となる、秋の彼岸前後の時期に咲きます。花被は六枚で細長く、縁は縮れ、外側に強く反り返り、雄しべと雌しべは外へ長く伸びます。球根には毒性があり、その植生からモグラなどの害獣対策として、水田の畦などに植栽されています。

秋の彼岸になると、私の席の窓越しにこの花が咲くことから、必ず目にとまります。この頃には蝉の声から鈴虫の音色に変わり、秋の訪れを感じます。と同時に、虎塚古墳の秋の壁画公開の準備に入ります。ただし今年には新型コロナウィルスの影響で、春に続き秋の公開も中止となりました。寂しい秋となりそうです。(稲田健一)



2019.09.26

埋文センターの日々 2020 前期

4月

2-5 虎塚古墳春期一般公開(新型コロナウイルスの影響により中止) / 18- 野富士山遺跡本調査 / 7-16 堀口遺跡本調査終了 / 7-16 休館



5月

12-19 堀口遺跡試掘調査 / 20-27 相対遺跡試掘調査 / 19- 新型コロナウイルス対策を実施し開館

6月

2-5 高野富士山遺跡試掘調査 / 9-16 市毛下坪遺跡試掘調査 / 18 堀口遺跡本調査開始 / 24 茨城大学遠隔授業【埋文センターの活動】 / 30- 三反田古墳群試掘調査開始

7月

茨城大学遠隔授業【虎塚古墳について】 / 7 堀口遺跡本調査終了 / 7-16

磯崎東古墳群試掘調査 / 15 三反田古墳群試掘調査終了 / 16-31 中曾根遺跡試掘調査 / 17 日立市金沢小学校へ資料貸出【井上資料縄文土器ほか】 / 30- 平井遺跡・三反田古墳群試掘調査開始

8月

4-7 松原遺跡試掘調査 / 4-28 高野富士山遺跡本調査 / 7-16 堀口遺跡試掘調査終了 / 13 平井遺跡試掘調査終了 / 18-25 岡田遺跡試掘調査 / 18-25 博物館実習(茨城大学・国士舘大学・茨城キリスト教大学)



25-28 東原遺跡試掘調査 / 27

日立市金沢小学校より資料返却

9月

1-29 東石川新堀遺跡試掘調査 / 3 千葉市埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財ロビー巡回展『石斧展―生産・流通・保有・消費―へ資料貸出【半分山遺跡石斧】 / 8-16 堀口遺跡・市毛上坪遺跡試掘調査

12-ワンケースミュージアム51「いつ付いた? 籠目痕のある遺物たち」開始 / 13 ふるさと考古学特別版①「楽しい考古学」(講師・さかいひろこ氏・矢野徳也氏)



15-29 平井遺跡試掘調査 / 15-

部田野富士山遺跡試掘調査開始 /

27 木所睦・山崎颯太氏(茨城大学資料見学【松原遺跡土器ほか】 / 29- 老ノ

塚古墳群試掘調査開始 / 茨城県立

歴史館特別展『JOMON Period』へ

資料貸出【三反田堀塚貝塚土偶ほか】 / 神

栖市歴史民俗資料館資料調査【後野

遺跡石器ほか】

入館者状況 (2020.4.1. ~ 2020.9.30)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	15	53	0 (0)	0 (0)	0 (0)	53
5月	12	40	0 (0)	0 (0)	0 (0)	40
6月	25	135	0 (0)	0 (0)	0 (0)	135
7月	27	134	0 (0)	0 (0)	0 (0)	134
8月	26	248	7 (0)	56 (0)	0 (0)	304
9月	26	137	1 (0)	16 (0)	0 (0)	153
合計	131	747	8 (0)	72 (0)	0 (0)	819

○内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『市報ひたちなか』及び下記のホームページでお知らせします。
<http://hitachinaka-culturehall.jp/news-cat/kokuchi/>

編集後記の 虎の子

前号の編集後記では、今年二〇二〇年が虎塚古墳壁画公開開始から四〇年となることと、「ふるさと考古学」講座を一四年間続けてきた成果を紹介した。それから半年後、予想も付かない状況となっている。新型コロナウイルスの影響により、春に続き秋の壁画公開も中止となり、一五年目の「ふるさと考古学」も事実上中止となった。ただし、この状況を悲観しているだけでは前に進めない。前向きに捉えるなら、壁画を一年間公開していない状況の環境データを得られることができ、公開した時との比較が出来るチャンスでもある。また「ふるさと考古学」についても、インターネットなどを活用できることになれば、遠距離の講師を招くことも出来るし、埋文センターに来ることが難しい受講生が参加してくれるかもしれない。まだまだやること、出来ることはたくさんありそうだ。

インターネットといえば、虎塚古墳の壁画をもとに擬人化したキャラクターをみつけた。この夏、偶然この作者との出会いがあり、展示などでこのキャラクターを使用したいことをお願いしたところ、快く承諾いただけました。今後は虎塚古墳を応援するキャラクターとして活躍を考えている。今年生まれた新しい展開である。詳細は次号に。



©ヨスミナミ

ひたちなか埋文だより 第53号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2020年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市申根3499 ☎029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷



表紙の写真では、たんぼぼ保育園にご協力いただきました。